



「デデッポーポー」って、聴いたことある？

キジバト *Streptopelia orientalis* は日本に生息する留鳥。ただし北海道から種子島では亜種キジバト *S. o. orientalis*、奄美諸島や琉球諸島では亜種リュウキュウキジバト *S. o. stimpsoni* が繁殖しています(日本鳥学会, 2012)。(「キジバト亜種キジバト」と書くと長いので、以下、キジバトと書く時は、香川県で身近な亜種キジバトのことです。)

さて、キジバトは現在の山野だけでなく農耕地や市街地でも生息しており、近年になって都会化した野鳥として有名です。前回のアオサギと同様に、まずは香川県の文献記録を見てみましょう。

文献 No.	記録年 (刊行年)	記載(抜粋)
1	不明 (1968)	キジハト ハト科 留鳥 俗名ヤマバト (略)目と足は赤く足はやわらかく耕地近くの雑木林にいる。耕地を荒すことがある。(略) 近年増加している
2	不明 (1984)	昭和四六年九月四日の新聞記事に“見事な愛の巣”という見出しがあった。多度津町の国鉄多度津工場内で、アオギリの木につくったキジバトの巣の話である。巣材に木の枝を使わずに、機械工場に捨てられていた鉄くずや針金を組みあわせてつくっていたのである。／しかも一か所だけでなく数か所もあり、立派に産卵していたから珍しい。／近年、キジバトが多くなり市街地でも見かけたり繁殖するようになった。(昭 51.3.28)
3	不明 (1993)	農耕地に近い森林で周年生息している留鳥で、個体数も多い狩猟鳥である。近年、生息地が市街地に移行しており、環境の変化に対する順応性がある野鳥で、県下各地で観察され、数も増加しており、農作物の被害も増えている。
4	不明 (1996)	本来は山地の鳥だったが、市街地や公園などでもよく見られる。

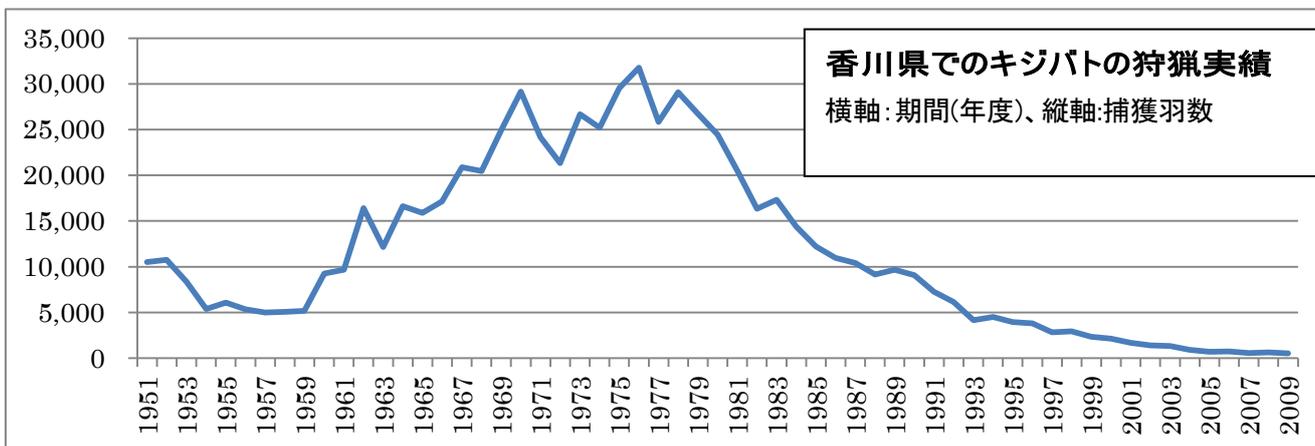
分布を記録している文献が少ないのですが、1960年代後半には耕地近くの雑木林に限られていたものが、80年代～90年代に市街地に進出、90年代後半には街中に定着したと言えそうです。

さて、全国的には1960年代に、都市周辺での銃猟制限が影響して都市への進出が始まり、1970年代には大都市の街路樹でも繁殖していたようです(和田, 1997)。大都市での繁殖開始は、営巣できる程度に街路樹が成育したことと関係があるかもしれませんが、香川県では一体何がキジバトを駆り立てたのでしょうか。

狩猟が、山野から街にキジバトを追い出した？

さて、香川県では上記のとおり 80～90年代がおそらく分布の変化が大きかった時代です。キジバトは狩猟鳥獣であり、前述のとおり、銃猟制限が影響しているとの説があります。そこで香川県の過去の狩猟記録を整理してみました(最近データ更新をしていないので2008年までですが、今回の目的には支障はないでしょう)。

グラフを見てみましょう。1957年(昭和32年)を底に、以降は基本的に右肩上がり。昭和45年(1970)に約30,000羽に迫った後、昭和51年(1976)に30,000羽を突破。そして昭和53年(1978)に再び30,000羽に迫り、以降はなだらかに減少しています。増加時代の特徴は増減を繰り返す点ですが、これは前年に大量に捕獲した結果、ハンターが自主的に抑制したり、翌年の繁殖ペアが減少した影響かもしれません。ただそれでも山野での羽数は維持されるので、ハンターはほとんど狩猟数を増やしたのでしょうか。



S27	S28	S29	S30	S31	S32	S33	S34	S35	S36	S37	S38	S39	S40	S41
1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966
10,740	8,347	5,384	6,095	5,362	5,010	5,080	5,175	9,265	9,671	16,405	12,155	16,636	15,890	17,159
S43	S44	S45	S46	S47	S48	S49	S50	S51	S52	S53	S54	S55	S56	S57
1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982
20,481	24,930	29,176	24,177	21,354	26,676	25,216	29,539	31,782	25,835	29,094	26,754	24,451	20,492	16,332
S59	S60	S61	S62	S63	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10
1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998
14,394	12,236	10,977	10,424	9,151	9,671	9,070	7,251	6,161	4,157	4,516	3,935	3,825	2,831	2,924
H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21					
2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009					
2,123	1,692	1,394	1,315	921	699	726	562	634	524					

一方、減少時に増減は殆ど有りません。これはハンターの減少もあるでしょうが、その激減具合からキジバトが実際に減ったか、捕れにくくなったものと思われまます。そして、この狩猟羽数が減り始めた時期は、香川県でキジバトが街中に進出した1980～1990年代に一致しています。

山野において、キジバトが1980年代以降も以前と同様に繁殖しており、増えすぎて溢れた個体が街中へ進出していたのだとすれば、1980年代から狩猟羽数は減少しないはずです。

つまりこのグラフは、1980年代から山野でのキジバトの生息数が確実に激減したことを示し、またバードウォッチャーは、この頃からキジバトが市街地に進出したことを記録していることから、「香川県では1970年代までに山で大量に狩猟されていたキジバトが、1980年前後から街中に逃げ出した」という仮説が立てられます。

実は香川県におけるキジバトの狩猟羽数は、昭和26年(1951)から昭和49年(1974)までは全狩猟鳥獣中2位。昭和50年(1975)から昭和59年(1984)までは、なんとスズメを押さえて1位でした。現在の生息数とは一致しないとしても、スズメ以上というのは明らかに捕り過ぎです。そして、この狩猟羽数1位の時期と、キジバトが市街地に進出し始めた時期がほぼ一致しているという点からも、先ほどの「山から街に逃げ出した」という仮説を支持します。

もしキジバトが街中へ進出できなければ、今頃は希少種になっていたかもしれません(たぶんその実例が、絶滅したリョコウバトです)。狩猟も趣味・生業として両立すべきですが、行き過ぎるとこうした問題が発生するという実例を、キジバトは教えてくれているのではないのでしょうか。

- ・1968, 岡内英孝. 香川県に於ける野鳥の生態, 岡内英孝 【文献No.1】
- ・1984, 山本正幸 編集: 高松市立図書館. 市民文庫シリーズ11 香川の野鳥, 高松市立図書館 【文献No.2】
- ・1993, 香川県. 香川県のとりとけもの 平成5年3月, 香川県 【文献No.3】
- ・1996, 四国新聞社 編集協力:(財)日本野鳥の会香川県支部. 香川の野鳥ウォッチングガイド 【文献No.4】
- ・2012, 日本鳥学会. 日本鳥類目録改訂第7版, 日本鳥学会